

ペーターゼンにおける Mischung の教育的意義

佐久間 裕之
(玉川大学)

はじめに

今日、我が国の教育界では異年齢集団による学習や交流への関心が高まっている。既に現行の小・中学校学習指導要領においても「総合的な学習の時間」で「グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態」を用いることが盛り込まれているが、それがさらに今回の新しい学習指導要領(平成20年3月告示)では、特別活動(児童会活動、クラブ活動、学校行事)の中で「異年齢集団による交流」が加えて明記されたのである。無論、学校現場では既にこれまでも各種行事や児童会・集会活動、クラブ活動などにおいて異年齢集団の交流は行われてきたし、いわゆる「縦割り班」活動等のさまざまな取り組みがなされてきた。今回の学習指導要領の改訂は、異年齢集団を用いたこうした活動を更に充実していくことを企図してのことと言える。

ところで、海外に目を転ずると、異年齢集団によるこうした学習や交流をより徹底・充実していくために、通常の年齢別・学年別の学級編成を廃止し、学級そのものを異年齢集団によって編成するケースが見られる。例えばドイツのベルリン州では、日本の小学校に相当する Grundschule(基礎学校)の既に約70%で、1・2学年が一緒の異年齢集団による学級編成が行われ、異年齢集団による学習や交流の徹底・充実が図られている(Senatsverwaltung für Bildung, Wissenschaft und Forschung 2008, S. 6)。

このように年齢別・学年別の学級編成を廃止し、学級そのものを異年齢集団によって編成することを、ドイツでは Jahrgangsmischung(異学年混合)あるいは Altersmischung(異年齢混合)と表現している。異年齢集団による学級編成に関しては、しかしながら、ベルリン州のように積極的に推し進めようとする動きがある一方で、こうした動きに対する懐疑的・否定的見解も見られる。我が国でも複式学級を除けば通常の学級編成は年齢別・学年別であり、したがって、異年齢集団による学習や交流の機会は設けられていても、異年齢集団による学級編成を基本形態とはしていない。それは、異年齢集団による学習や交流に意義を認めつつも、年齢別・学年別を廃止して異年齢集団による学級編成を行うまでの積極的な理由が見出せない、あるいはそうした編成には問題があると考えられているためではなかろうか。異年齢集団による学級編成には、本来、教育上どのような意義があるのか。

さて、教育史上、年齢別・学年別の学級編成を廃止し、異年齢集団による学習や交流を積極的に推し進めた代表的人物の一人とされるのは、ドイツ改革教育の「とりわけ卓越した人物」(Blättner 1968, S. 265)と評されたペーター・ペーターゼン(Peter Petersen, 1884-1952)である(Xochellis, S.26; Boyd/Rawson, p. 47)。ペーターゼンは、彼の名前を一躍有名にした「イエナ・プラン」において、異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせることを Mischung と呼び、年齢別・学年別の学級編成を廃止し、この Mischung による基幹集団を学校生活の中核にすえた。本稿では、現在ドイツで異年齢集団による学習や交流を推し進めるにあたって、その理論的支柱の一つとみなされているペーターゼンの Mischung の思想を取り上げて、その本来の教育的意義を確認していきたい。

・ペーターゼンとイエナ・プラン

周知のようにペーターゼンは1923年、ヘルバルト学派のヴィルヘルム・ライン(Wilhelm Rein)の後任としてイエナ大学教育科学講座の教授に就任し、1924年4月からイエナ大学付属学校(Universitätsschule)で異年齢集団を用いた内的学校改革に取り組んだ。そしてその成果を1927年8月、スイス・ロカルノで行われたNEF(New Education Fellowship)の第4回国際会議で発表することになったのである。その際、彼の改革案は、この会議の責任者、NEF ロンドン本部のクレア・ソーパー(Clare Soper)とドロシー・マシューズ(Dorothy Matthews)によって、Dalton-Plan や Winnetka-Plan に似せて偶然にも「イエナ・プラン」(Jena-Plan)と勝手に命名されてしまったという(Petersen 1927, S. 3.)。しかしこの国際会議の大会プログラムの中には、まだ「イエナ・プラン」の表記は見られない(Vgl. Vorträge und Arbeitsgemeinschaften, in: *Locarno, Weltkonferenz für Erneuerung der Erziehung* [1927])。このプログラムには「個性化の方法」と題した分科会のこと記されており、その中には、当時既に有名であったと考えられる「Dalton(-Plan)」や「Winnetka(-Plan)」、「Projekt-Method」などが講演リストに明記されている。しかし、「イエナ・プラン」の表記はなく、ただ「etc.」と書かれているだけである。つまり、「イエナ・プラン」はこの国際会議で発表される以前にはまったく無名のプランであった。それが、この会議によって一躍有名になったのである。これを契機としてイエナ大学付属学校は「イエナ・プラン」の拠点として世界的に知られるようになり、このプランの綱要ともいえる小冊子 „*Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*“ (Langensalza: Beltz 1927) (後に „*Der Kleine Jena-Plan*“ と改題)も版を重ねることになった¹。

このように世界的に知られることになった「イエナ・プラン」であるが、その後、第二次世界大戦を経て、旧東ドイツ時代の1950年、拠点となっていたイエナ大学付属学校は体制側から突如閉鎖を宣告され、ペーターゼンの学校改革への取り組みは終焉を迎えた(1952年3月21日、彼はイエナで死去)。

・イエナ・プランの新たな展開

しかし、その後、旧西ドイツ側でイエナ・プラン校が戦後新たに誕生することになる。その中でも重要な学校のひとつとされているのは、ノルトライン＝ヴェストファーレン州ケルンにあるペーター・ペーターゼン・シューレ・アム・ローゼンマール(Peter Petersenschule am Rosenmaar)である。1952年7月10日、新校舎が完成し新たなスタートを切ったアム・ローゼンマール小学校は、当初八つの学年別学級で編成された公立学校だった。学校生活を内的に改革しようと模索している中で、この学校の教員たちはペーターゼンのイエナ・プランと出会う。そして翌年1953年には学年別学級制を廃止し、1年から3年までを混成したペーターゼンの意味における異年齢集団、すなわち基幹集団(Stammgruppe)による学校生活を開始したのである。

こうした旧西ドイツの動向に刺激を受けて、オランダへのイエナ・プラン導入に尽力したのが、NEF オランダ支部事務局長のスーザン・フロイデンタール＝ルッター(Susan

¹ 本書は現在までのところ63版まで発行されている(2010年9月24日現在)。

Freudenthal-Lutter) 女史であった。1959年6月6日、彼女はこのアム・ローゼンマール校を訪問し、イエナ・プランをめぐって積極的な国際交流を推し進めた。彼女の貢献によって、その後、隣国オランダでイエナ・プラン校が爆発的に増加することになったのである (Vgl. Verein der Freunde und Förderer zeitgemäßer Schularbeit e.V. 2002, S. 10)。イエナ・プラン校は、現在オランダでは既に220校以上に上ると言われている (リヒテルズ直子 2006, 237頁; Boes 2005, S. 4.)。オランダほどではないが、各州で教育方針の異なるドイツでも現在多数のイエナ・プラン校が存在している²。「イエナ・プラン」はごく普通の公立学校でできる内的学校改革案の一つであるため、(学校名に「イエナ・プラン」という名称はつけないものの)「イエナ・プラン」のコンセプトを一部導入する学校も存在している³。さらに(ペーターゼンの名前は明記しないものの)彼の思想を学習指導要領に取り入れたとされる州もある(例えばノルトライン＝ヴェストファーレン州) (Vgl. Günther 1985, Sp. 6626)。1920年代に新教育運動の代表者の一人として国際的な舞台上に登場したペーターゼン。彼の教育思想は、現代の公教育の中に生き続けていると言えるだろう。

・イエナ・プランの基本的特徴

さて、ペーターゼンとイエナ・プランについて、その誕生から現代ドイツでの位置づけまでを、これまで一瞥してきた。ところで、前述したように通常この「イエナ・プラン」の大きな特徴として挙げられているのは、年齢別学年学級制を廃止し、異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせる「基幹集団」(Stammgruppe)によって学校生活を組織することである⁴。この「異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせること」、すなわち Mischung について、ペーターゼンはこれが「最良であることを明確に宣言しなければならない」(Petersen 2007, S. 51)と述べている。ペーターゼンの弟子ディートリッヒ(Theo Dietrich)によれば、イエナ・プランにおいてこの Mischung は、「たいてい」次のような構成になるという(Dietrich 1995, S.72)⁵。

² ドイツ・イエナプラン教育学会のホームページには現在、ドイツ国内にある39校のイエナプラン校が掲載されている(http://www.jenaplan.eu/Schulen_05.12.08.htm アクセス日2009年6月15日)。しかし、2008年11月25日、ドイツ・イエナプラン教育学会副会長 Hartmut Draeger 氏によると既に50校近く存在しているとのことであった(2008年11月25日、ベルリン市内にある Draeger 氏の自宅でのインタビューによる)。

³ 例えば、ノルトライン＝ヴェストファーレン州ミンデン市にあるミヒャエル・エンデ・シューレなどが挙げられる。ここでは、第1学年～第3学年の子どもを混成した学級編成が行われている。

⁴ イエナ・プランを特徴づけるものとしては、このほかに「学習と自己形成の四つの原形態」とされる「対話(Gespräch)」、「遊び(Spiel)」、「作業(Arbeit)」、「行事(Feier)」がよく引き合いに出される。しかし、この Mischung は、イエナ・プランにおいて、これら以上に不可欠の要因と考えられており、この点に日本へのイエナ・プラン導入の困難性が潜んでいる。

⁵ Mischung の構成は、現在では学校によって柔軟に変化している。例えば前述のペーター・ペーターゼン・シューレ・アム・ローゼンマール校では、今日第1学年から第4学年までを一緒にした異年齢集団構成がとられている。

(図) Mischung の構成

学年 (Schuljahr)	基幹集団(Stammgruppe)	年齢(Lebensjahr)
第9 / 10 学年	青年集団(Jugendlichengruppe)	14 / 15 歳
第7 / 8 学年	上級集団(Obergruppe)	12 / 13 歳
第4 - 6 学年	中級集団(Mittelgruppe)	9 - 11 歳
第1 - 3 学年	下級集団(Untergruppe)	6 - 8 歳

・ Mischung をめぐる論点

前述したように、今日ドイツでは、この Mischung のことを特に異年齢という点に着目して Jahrgangsmischung (異学年混合) ないし Altersmischung (異年齢混合) と表現し、賛否両面から議論がなされている (Wagener 2008, S.51)。まず、Mischung を支持する主張から見ていくことにする。その要点は、年齢、成績、学校経験に差のある子ども同士で互いに助け合うことができるという点にある。例えば、年齢差のある子どもが同じグループ内にいることによって、年少の子どもは年長の子どもを手本にし、模倣できる。特に新入生にとっては彼らの面倒をみてくれる年長者からの配慮によって、入学時から安心感をもって学校生活が始められることになる。成績優秀な子どもは自分の知識を他の子どもに提供することで、自分自身の学習の進捗を知るとともに、自分の知識を確実にできるし、成績のよくない子どもも学校経験の少ない子どもを援助することができる。

それに対して、Mischung を批判する主張としては、年長の子どもが単に援助者としての役割を演じることになり、その結果、彼ら自身が自分の課題で成果を上げることが損なわれること、年少の子どもが年長の子どもによって支配されたり、あるいは年長の子どもがよくない模範になる危険があることなどが挙げられている。

Mischung に賛同する場合であれ、それを批判する場合であれ、現在の議論に共通しているのは、Mischung が学校における学習と生活の両面で子ども一人ひとりにとってどの程度利益があるかという個人主義的な観点から捉えられていることである。しかも主として学力面についての関心が支配的になっている。ヨーロッパでも所謂「PISA ショック」がもっとも深刻だったと言われるドイツでは、学力との関連で Mischung の是非が論じられているのも、頷けるところではある (Vgl. Laging/ Leutert 2002, S.52-53)。

しかし、ペーターゼン自身が構想した Mischung は、現在導入され、また賛否が議論されている Mischung とはその目的とするところが根本的に異なっていた。それを確認するために、彼の人間観と教育観を見てみることはじめてみることにする。

・ Mischung の根底にあるペーターゼンの人間観・教育観

まずペーターゼンの人間観であるが、彼は次のように述べている。

「彼 (人間) は、ただ彼の文書のゆえに、あるいは彼の言語能力、組織編成能力、技術力等において才能があるから、頭としてあるいは手として、部分的に必要とされているわけでは決してない。むしろ彼はつねに全人として必要とされているのである」 (Petersen 2007, S.25)。

ペーターゼンにとって人間は何らかの能力の有無によって必要とされたりされなかったりする存在ではない。どの人間も最初からすでに「全人」(ganzer Mensch)として必要とされている存在なのである。能力差だけでなく、人間社会では身分や階層差、年齢差、性差なども、人間の間には差別や排除をもたらすことがある。しかし、ペーターゼンはこうした違いによって人間の価値がかわるものではないという考え方に立っている。

次にペーターゼンの教育観についてみることにする。彼にとって「教育」(Erziehung)とは、「個性(Individualität)を人格性(Personlichkeit)にまで完成する」ものである(a. a. 0., S.20)。能力差、身分や階層差、年齢差、性差など、人間は現実的に見て他人と比べれば、さまざまな差異を帯びた存在である。しかしペーターゼンは、個々の人間は皆「彼個人の生命の特性」(die Eigenart seines persönlichen Lebens)を持ち(a. a. 0., S.25)、この点で全く同様に尊重されるべきだと考えている。なぜなら、「どんな地位でも、どんな知的水準でも全く同様に、あらゆる人が個人の生命の調和へと到達できるし、また純粋な心根を持ち高貴な行為を行う生命に到達できる、ということを知ることは根本的に大切なことである」(a. a. 0., S.25)からである。そして「彼個人の生命の特性」を「個性」として捉え、この「個性」を個々人の人格形成の出発点に位置づけているのである。

また、ペーターゼンは教育について次のようにも述べている。「人間的な共同体の中で、人間たちが無意図的にお互いのために存在し、活動しているところに教育は生まれるのである。」(a. a. 0., S.26)このように教育は人為的な作用としてより、むしろ人間的な「共同体」(Gemeinschaft)の中で、自然に生まれる作用であるとみなされている。この共同体は会社や企業のような「利益社会」(Gesellschaft)ではなく、その最良な形態や模範は、「家庭」(Familien)の中に求められている。

ペーターゼンにとって「イエナ・プラン」は「学校現実が真に教育的機能を発揮できるように、伝統的な学校現実を内的に変革しようとする試み」(a. a. 0., S. 19)であった。彼は学校が「純粋な授業施設」(reine Unterrichtsveranstaltung)ではなく、子どものさまざまな違いが「個性」(Individualität)として尊重されて、さまざまな「個性」が寄り集まり協同する中で人格形成がなされていく場所となること、すなわち「教育共同体」(Erziehungsgemeinschaft)、「学校共同体」(Schulgemeinde)となることを願っていたのである(a. a. 0., S.20, 21)。ペーターゼンは、こうした学校を「ペスタロッチーの意味における『人間学校(Menschenschule)』」(a. a. 0., S. 27)とも呼んでいる。彼はまた、学校を「家庭学校」(Familienschule)とも呼び、「学校が真の家庭学校として現れるということが両親ならびに教育者たちから同じように望まれているのである」(a. a. 0., S.41)と述べ、教室空間を「学校居間」(Schulwohnstube)と呼ぶのである(a. a. 0., S.60)。彼は、学校や教室空間が一時的にはなく持続的にそのような場所となることを目指して、年齢別学年学級制を廃止してMischungによる「基幹集団」への転換を図ったのであった。

ここで注意すべき点は、ペーターゼンにとってMischungは単に一時的な活動として取り入れられているものではなく、むしろ学校生活の基本構造となっていることである。したがって、年齢別・学年別の学級編成という基本構造を変えないままで時折異年齢集団による学習や交流を一つの活動として行うというのでは、Mischungの本質は捕まえられない。また、そうした一時的な活動では「教育共同体」、「学校共同体」の創出は困難である。

今日我が国で行われている異年齢集団による学習や交流は、この点で問題をはらんでいると言えよう。

おわりに

以上、ペーターゼンの *Mischung* の思想について述べてきた。彼の *Mischung* の思想は、個性尊重や人格形成という教育の主要課題、そして人間をその階層・身分・能力・年齢・性別などによって差別することのない共同体の創出という課題に、まさにストレートにアプローチしようとしたものであったといえることができる。こうした重要な課題に真摯に向き合おうとする人びとにとって、そして真に効果的な異年齢集団による学習や交流を実現しようとする人びとにとって、ペーターゼンの *Mischung* の思想は 80 年以上の歴史を経た今日においてなお、古びることのない価値ある数多くの示唆を与えてくれるであろう。

<文献目録>

- Blättner, Fritz(1968) : *Geschichte der Pädagogik*. 13. Auflage, durchgesehen und erweitert von Dr. Hans-Georg Herrlitz, Heidelberg: Quelle & Meyer.
- Boes, Ad (2005): Jahrgangsübergreifende Lerngruppen- Paradigma für eine Schule der Zukunft. In: *Kinderleben. Zeitschrift für Jenaplan-Pädagogik*. Heft 25.
- Boyd, William/ Rawson, Wyatt (1965): *The Story of the New Education*. London: Heinemann.
- Dietrich, Theo (1995): *Die Pädagogik Peter Petersens. Der Jena-Plan: Beispiel einer humanen Schule*, 6., verbesserte und erweiterte Auflage, Bad Heilbrunn: Julius Klinkhardt.
- Günther, Henning (1985): Tiefgreifende Änderung in der Grundschule. In: *Theologisches, Beilage der Offerten Zeitung*, 38. Jg. Nr.9 und 10.
- Laging, Ralf/ Leutert, Hans (2002): Altersmischutes Lernen? In: *Pädagogik*, 54. Jahrgang, Heft 10.
- Petersen, Peter (1927): *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, Langensalza: Beltz.
- Petersen, Peter (2007): *Der Kleine Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, Weinheim u. Basel: Beltz.
- Senatsverwaltung für Bildung, Wissenschaft und Forschung (Hg.)(2008): *Bildung für Berlin, Schulbeginn 2009*, Berlin: Oktoberdruck AG.
- Verein der Freunde und Förderer zeitgemäßer Schularbeit e.V. (Hg.)(2002): *50 Jahre PPS. Reif für Museum oder Konzept für die Zukunft?*, Graphia Media GmbH.
- Wagener, Matthea (2008): Streitpunkt Altersmischung. Jahrgangsklassen oder Jahrgangsmischung? In: *Grundschule. Magazin für Aus- und Weiterbildung*, Heft 6.
- Xochellis, Panos (1967): *Jahresklassen oder nicht? Die Überwindung des Klassenschematismus in der Schule*. München: Ehrenwirth.
- リヒテルズ直子 (2006) : 『オランダの個別教育はなぜ成功したのか イエナプラン教育に学ぶ』平凡社。